

聴きどころ：2020年4－6月定期公演

4月|「アメリカ音楽の伝道師」スラットキンらしさが反映されたプログラム



レナード・スラットキン

アメリカの名指揮者レナード・スラットキンを4年ぶりに迎える。いずれのプログラムにも、現代作品の熱心な紹介者であり、また「アメリカ音楽の伝道師」を自認するスラットキンらしさが色濃く反映されている。Aプロの細川俊夫《冥想》は、東日本大震災の犠牲者に捧げられた一連の楽曲の一つ。深い絶望の末にもたらされる、慰めと救いの兆しが胸に迫る。同じ2013年に書かれたアダムズ《サクソフォーン協奏曲》にはジャズのイディオムが満載で、ブランド・マルサリスこそ、この曲のソリストにふさわしい。後半はヴォーン・ウィリアムズ《交響曲第5番》。初演に立ち会った聴衆は、安らぎに満ちた曲想から、第2次大戦の終結を予感したという。Bプロはハイドン《交響曲第70番》とマクティ《交響曲第1番》。どちらもオーソドックスな4楽章形式だが、書かれた時代には300年以上の隔たりがある。古今の極にある両者のコントラストを味わって頂きたい。メンデルスゾーン《ヴァイオリン協奏曲》では、世界の注目を集める若手レイ・チェンがN響に初登場。Cプロは、生誕・没後ともに区切りの年にあたるコープランド特集。バレエ音楽《ロデオ》《アパラチアの春》、《静かな町》、石丸幹二をナレーターに迎えた《リンカーンの肖像》など、スラットキンが「アメリカの最高峰」と位置づけるコープランドの代表的な名曲をまとめて聴ける貴重なチャンスである。

5月| “今”に直結する「20世紀の音楽」を パーヴォの指揮で聴く



パーヴォ・ヤルヴィ

3つのプログラムの中心となるのは、我々の生きる“今”に直結し、人生観・価値観に多面的な示唆を与えてくれる20世紀の音楽。「聴き手が何かを考えるきっかけになれば」と指揮のパーヴォ・ヤルヴィが抱負を語る。Aプロ前半は、第2次大戦が始まって間もなく、相次いで初演されたブリテン《シンフォニア・ダ・レクイエム》と《ヴァイオリン協奏曲》。どちらも忍び寄る戦争の影と切り離して考えることはできない。対照的にショスタコーヴィチ《交響曲第9番》は第2次大戦の直後に完成した。《第9》とは思えない軽妙な味わいに、戦争からの解放感を読み取る見解もあるが、果たして…。ジャーニヌ・ヤンセンのソロはシーズン屈指の聴きもの。BプロはR. シュトラウス《ヨセフの伝説》から交響的断章と《アルプス交響曲》。

シュトラウスの作品に継続的に取り組んできたパーヴォ&N響が、これらの曲を避けて通るわけにはいかない。緻密なオーケストレーションを適切なバランスで描き切ることは難しく、指揮者とオーケストラの真価が問われることになる。**Cプロ**はフランスの都パリがキーワード。パリを訪れ、《交響曲第31番》で喝采を浴びたモーツァルト。ガーシュウインはこの街から靈感を得て創作活動を行った。《グロリア》のプーランクは生粋のパリジャン、そして《ピアノ協奏曲へ調》を弾くジャン・イヴ・ティボーデはパリ国立高等音楽院出身、指揮のパーヴォはパリ管弦楽団の元音楽監督である。

6月|3人の世界的指揮者が、個性的なプログラムを披露



(左から)ケント・ナガノ、鈴木雅明、ユッカ・ペッカ・サラステ

Aプロは日本にルーツを持つアメリカの世界的指揮者ケント・ナガノ。海外のオーケストラと共にたびたび来日しているが、N響の指揮台に立つのは今回が初めてである。どのオケと何を演奏するか、最もふさわしいプログラムを見極める能力には卓越したものがあると言われるナガノ。初共演に大曲マーラー《交響曲第9番》を選んだことは、彼がN響と何を實現したいかの重要なヒントになるだろう。**Bプロ**の鈴木雅明もN響と初共演。言わずと知れたバツハ演奏の大家で、今や日本を代表する指揮者の一人である。オルガン演奏さながらに躍動的で雄弁な低音と、合唱パートの正確なディクッションが、鈴木音楽作りにおける大きな特徴となっている。生誕150年を記念したベートーヴェン《ミサ・ソレムニス》で、ともすれば日常の些事に埋没してしまいがちな私たちに、現実を超越した視座を与えてくれるに違いない。**Cプロ**のユッカ・ペッカ・サラステは、5年ぶりの定期公演登場となる。祖国の作曲家シベリウスの音楽に「重力をいつの間にか操作されているような感覚」を覚えるというサラステ。今回演奏する《フィンランディア》や《交響曲第1番》でも、そうした特徴を前面に出したアプローチが見られるのだろうか。ストラヴィンスキー《ヴァイオリン協奏曲》を弾くペッカ・クーシストは、ヴァイオリニストでもあったサラステの強い推薦で共演が実現した。

西川彰一(NHK交響楽団演奏制作部長)